

日本におけるプロト産業化期の地域活性化（二）

— 群馬・埼玉両県における公立小学校立地集落の最高活性化 —

一 はじめに

およそ、歴史地理学においては、時間の推移とともに、環境（空間）が変容するという自明の理を基盤として、研究が積み重ねられてきた。時間の推移は、厳密にいえば平板ではなく、紆余曲折をもち、極論が許されるならば、変幻自在の趣を呈する。しかし、大局的にみれば、政治・経済・社会・文化などが、相対的に長期間にわたって安定する「安定期」と、それらが相対的に短時間で流動する「変革期」とに分けることが可能である⁽¹⁾。

ところで、日本において、前述のような多面的観点に基づく「変革期」を、具体的にいつに求めることができるであろうか。現時点に立脚すれば、現代をもって、産業化がますます進展しつつある社会であると認めざるを得ないことは、異論を挟む余地がなからう。この産業化のプロセスを、現時点から巨視的にさかのほれば、一五年戦争、第一次世界大戦、日露・日清両戦争、明治維新、安政開港などによる諸変革を、想起できよう。これらの諸変革を多角的に検討することによって、さらに大変革とみなし得るものは、一五年戦争と幕末～明治初期の二大変革であったと、

筆者は考える。とりわけ後者は、産業化の始期としての意義が大きく、標題に掲げたプロト産業化期の語は、この変革期をさしている⁽²⁾。この時期において、すでに活性化の地域差が生じていたとすれば、それは、いかなる要因に基づくものであるかを、筆者は追究したい。これによって、変革期のもつ歴史地理学的意義を探る糸口としたいからである。

二 地域活性化の全国的趨勢

筆者は、先に、明治七年（一八七四）における公立小学校の授業料・教員数を指標として、この時期における地域活性化の地域差を検討した⁽³⁾。授業料を指標としたのは、父母の受益者負担額が、地域活性化の差異を示唆すると考えたからであり、教員数を指標としたのは、地域活性化の指導力たり得る人材分布の地域差、ならびに学校規模の地域差の検討を意図したからである。その結果、次のことが明らかになった。

a 本州・四国・九州は、授業料分布パターンの上から、東日本と西日本に両分されていた。そして両者の漸移地帯は、ほぼ富山・静岡両県を結ぶ地帯となっていた。東日本の特色は、関東に大きなウエイトをもつ一方、これに連なる高領地帯とは、いわば線状に結ばれていた。これに対して、西日本では、近畿中央部の低領地帯の西方に、広範に、ウエイトの大きなブロック状の高領地帯が形成されていた。前者では、関東平野から線状をたどる活性化をみたのであるが、後者では、周辺のブロック状の活性化が、空白的な中心部をささえる構造となっていたのである。つまり、これらの分布パターンを通じて、前者では、中心からの遠心的活性化が、また後者では、並立した中核における活性化がそれぞれ示唆された。

b 東日本・西日本の活性化を比較すると前者では、急激な活性化地域の中心が関東平野のほぼ中央に位置し、ここから東方に向かって、安定した活性化地域や活性化の遅れを示す地域が派生し、その先端部にも急激な活性化地域が分布した。しかし西方には、活性化の遅れと“活性化いまだし”の地域がみられた。これに対して後者では、急激な活性化地域が近畿・中・四国・九州にわたって、東西方向に分布したとはいえず、それらの間に安定した活性化地域や、活性化の遅れを示す地域、あるいは“活性化いまだし”の地域が介在した。そして東・西の両端のほとんどは、安定した活性化地域や、活性化の遅れを示す地域となっていた。これを要するに、東日本における活性化が単核的であったのに対して、西日本のそれは、多核的な傾向をもっていたのである。

c 東日本におけるプロト産業化期の活性化をみると、最も著しく表れていたのは、群馬県である。ここでは、西毛においては、蚕糸業を基盤としたとみられる活性化が、西高東低を、また北毛・東毛においては、東隣する栃木県側の鉱業や織物業の発展に基づく交流に起因するものとみられる活性化が、東高西低を、それぞれ表していた。さらに詳細に検討すると、中心的市街地からほど遠い地域であっても、むしろ、県域の内外を通ずる河川及び道路に依存するコミュニケーションによって、活性化が進められていたものとみられる。また、活性化の傾向を大づかみにみると、西毛において最も高く、次いで北毛、さらに東毛の順となっており、明治中期以降における製糸業の定着性と進行(4)と、ほぼ符号していた。

d cにおいて群馬県から南方へ連続して活性化を示すのは、埼玉県であった。ここでは、丘陵及び台地から西部山地にかけての地域のうち、荒川以北とその支流赤平川以北においては、群馬県の西毛から連続して蚕糸業を基盤としたとみられる著しい活性化が進展した。また、水陸交通の中樞をになう東武平野においては、東京(江戸)圏を反

映したとみられる安定した活性化が、広範にわたって認められた。そして、丘陵及び台地において、東京（江戸）圏のインパクトによる活性化は、川越と入間川本流を結ぶ線以南に限られた。一方、相次ぐ水害や近世の所領関係によって影響されたと思われる「活性化いまだし」の地域が、秩父大宮を中心とする荒川本流上流部や、荒川中流右岸、入間川上流域において、局部的に認められた。

三 群馬・埼玉県の最高活性化集落

本稿では群馬・埼玉両県において、きわめて著しい活性化を示していた公立小学校がいかなる特質をもつ集落に立地していたかを明らかにすることによって、活性化の地域差を生じた要因を解明する。一般的には、生徒一人あたりの授業料（月謝）が高額であればあるほど、また教員一人あたりの生徒数が少なければ少ないほど、活性化が著しかったと解される。そこで、文部省第二年報（明治七年（一八七四））によって、両県における学校ごとの数字を算出した⁵⁾。そして、生徒一人あたりの授業料が一三〇―一九銭であると共に、教員一人あたりの生徒数が四五人未満であるという二つの条件を満たす二六校を、最高の活性化を表すものと考えて抽出した。次に、これらの学校が立地する集落の特質を皇国地誌⁶⁾を使用して考察する。

(一) 上位階層校立地集落

A 授業料⁷⁾一八〇―一九銭校立地集落

活性化が最も高いのは、授業料一九銭・生徒数⁸⁾三〇人の前橋連雀町と、同一九銭・四〇人の同曲輪・同菅両町であった。前橋は、平坦な後背地をもち、利根川とその分流広瀬川に臨む城下町を主体としていた。したがって、宅

地が町域の八四%をしめ、東京都、清水越往還、八幡山道、高崎道、大間々道、伊香保温泉道が通じていた。戸数は、平民一六〇七に対して、士族が八三二を数え、そのうち、転入⁽⁹⁾戸数は、平民二四五・士族三一に達していた。また人口は、平民七七九八に対し、士族が三七八八であり、そのうち、転入人口は、平民七五三、士族でも一五五に及んでいた。一方、他地域への転出⁽¹⁰⁾人口については、士族二五七が、平民一一七を凌いでいた。つまり、総戸口の約三分の一に及ぶ士族が居住しており、一方維新に伴う転入人口が、特に士族においてみられたものの、これをはるかに上回る転入戸口が、特に平民において認められたのである⁽¹¹⁾。

前記の戸数のうちの就業構成は、商業四六%に次いで、農業二二%、工業・雑業各一六%であり、女子人口の五%が蚕糸業、五%が縫物・織物商業に従事していた。しかも、牛馬の飼育頭数は、牛四五(牝三〇・牡一五)⁽¹²⁾、馬三五(牡)に及び、荷車四五五、人力車二二七、馬車七、漁船一が保有されていた。かくて、繭五二〇石(上等二五五石・中等二六五石)、生糸一万六七九五貫(上等一万三〇九三貫・中等三七〇二貫)を産し、繭のほとんどは製糸されて、横浜あるいは桐生新町へ送られた。また二万四三〇〇本の団扇がつくられ、前橋及びその周辺に売られた。したがって、地租五八〇〇円に対して、賦金七六五九円・雑税二五七九円に達していたのである。

前橋に次いで、授業料一八銭・生徒数四〇人という高い活性化を示していた内ヶ島は、旧旗本堀・大岡兩藩の相給であった。ここは、本庄道に沿い、北方に小山川、中央に備前堀がそれぞれ平行して東流する沖積平野に位置していた。耕作面積四二町一反のうち、田・畑の比は、ほぼ一対二であり、その土壌は、稲・麦に適すとされていたが、養蚕農家が多かった。物産には、米二一〇石・大麦一九二石・小麦六七石・菜種五九石・大豆五四石のほか、桑一〇〇駄・繭三三石・生絹五〇匹・太織五〇匹・生糸一貫があげられ、このほか、蚕卵紙三一九枚は、直輸出として横浜へ

送られた。農家数四九、同人口二七七であり、一戸あたりの家族員数は五・七であったが、同耕作面積は約八反六畝に過ぎず、蚕糸織物による副業が、農家経済を多分に潤していたものとみられる。かくて、牡馬一五、荷車（中車）二を保有し、貢租の納入は、地租米七三石・六一円のほか、賦金八三円に達していたのである。

B 授業料一五〇一六錢校立地集落

旧前橋藩領の東明屋は、榛名山東麓の標高約二五〇メートルに位置し、授業料一六錢・生徒数二〇人であり、伊香保往還に沿っていた。西方に井野川や用水堀、また東南方に天神川が流れていたが、砂礫質土壤であるため、しばしば旱害を受けることが多かった。したがって、米作には不適であったが、蕎麦・小麦などの生産には、事欠かず、耕作四八町九反のうち、田・畑の比は、一対五であった。物産として上げられた繭五五石・生糸五〇貫・絹七五匹・太織五二匹は、専ら前橋・高崎・安中などへ送られていたものとみられる。農家数八二、同人口三五二であり、一戸あたりの家族員数は、四・三であったが、同耕作面積は約六反に過ぎなかった。しかし、前述の往還沿いの立地が、農間稼ぎを促し、牡馬二一が保有されるほか、婦女子による織物生産も一般的であった。したがって、貢租としては、地租米一五石・九九円に対して、二二六円という高額な雑税を納入していた。

伊勢崎の西北に接し、前橋道に通ずる今泉は、授業料一六錢・生徒数三〇人であり、かつて伊勢崎藩、上総一宮藩、旗本杉山・新見両藩の四給の地であった。沖積平野に立地し、西方を流れる広瀬川によって、前橋と結びついていた。耕作面積一三六町三反のうち、田・畑の比は、ほぼ一対三であり、土壌の点では、稲・大豆・茶に適すとされたが、農家戸数一一四のうち、八八戸が養蚕農家であり、蚕糸・織物両業に従事する婦女子は、一七六人に及んでいた。人口は五三二であり、一戸あたりの家族員数は四・七であったが、同耕作面積は、一町二反と比較的広く、貢租につい

ては、地租米一〇〇石・二七七円に対して、雑税・賦金各八円・二円に過ぎなかった。しかし、物産として上げられる繭三五石・生糸一〇貫・太織二二四匹は、いずれも中等物とはいえ、自給自足以外はすべて伊勢崎へ送られていた。伊勢崎との往来にも、牡馬二三や、荷車一〇、人力車（一人乗り）二が使われていたものとみられる。

授業料一六銭・生徒数三〇人を示す越生は、旧上総久留里藩領であり、村内の東北部が越辺川の谷底平野、同じく西部は秩父山地の前山にあたり、相州街道・坂戸道に沿っていた。土壌の点では、桑・茶に適するものの、旱害による米作不適地帯とされ、耕作面積四八町のうち、田・畑の比はほぼ一対三であった。農家戸数一一八で、一戸あたり家族員数は四・六であったが、同耕作面積は、約四反に過ぎなかった。しかし、繭九九〇斤・生絹一一〇〇匹・太絹五〇〇匹・生糸一〇〇斤の繊維品のほか、団扇四二万本の物産が上げられ、これらに関連する生業によっても支えられていたものとみられる。生絹（裏絹）の取引が盛んであり、人家が軒を並べ、人力車八・荷車（中）六・牡馬一が使われていた。男は農・商両業、婦女子は蚕糸業に、専ら従事していたのである。しかし、一八七〇年までは法恩寺・正法寺両領（各二〇石・一〇石）があったためか、貢租としては、地租米四五石・九二円、賦金二〇〇円を納めるに過ぎなかった。

授業料一六銭・生徒数四〇人を示す石井は、標高三三〇メートル前後の赤城山西南麓に位置し、村域の約四分の三は山林であった。また旧前橋藩領であり、大胡（沼田）道・深山道・前橋道・三夜沢道・米沢道・田島道が通ずる陸上交通の拠点であった。耕作面積一一五町八反のうち、田・畑の比は、ほぼ二対三であり、土壌は中等で、稲・豆・麦には不適だが、小麦や桑には辛うじて適すとされ、茶の栽培は全くみられなかった。しばしば旱害に悩まされていたが、安政年間（一八五四〜六〇）の領主による上西峯・天神平への松苗栽植によって、改善されていた。

全村一三五戸は養蚕農家であり、このうち、冬季の炭焼き・狩猟が各八〇戸・九戸であった。一戸あたりの耕作面積は、約八反六畝であり、牡馬八〇・牝馬三〇・牝牛二の保有は、牧畜の盛況を示唆していた。また男の農間商いとしては、馬商三・生糸商二〇がみられ、蚕糸業に従事する婦女子は、二一〇に及んでいた。そして、繭九〇石がつくられ、米八五九石・大麦五三三石・小麦二八四石・粟七〇石・稗一九二石の穀物、蕎麥・蜀黍・大小豆類・芋類・人参・牛蒡・蔬菜・草実・木綿は、すべて中等物で、自給用を主としていた。柿類・茸類・瓜類・薪炭・茅竹の類の一部は、前橋に送られ、中等物である生糸六三貫・玉糸一〇貫・梳梯四万四〇〇〇把は、すべて前橋に売られていたのである。

授業料一五銭・生徒数三〇人を示す松井田は、旧安中藩領であり、中山道をはじめ、榛名道・八城道・一宮道が通ずる碓氷川沿いの中心地であった。松井田丘陵の南端を主とするため、耕作地五九町のうち、畑が九二%をしめていた。しばしば干害に苦しむものの、土壌は豆類・麦・桑・茶・楮に適していたとされ、一戸あたり家族員数六・三に對して、同じく耕作面積は三反弱と狭かった。

松井田の特色は、第二・三次産業従事者が多いことであり、戸数二二九のうち、農間商いと考えられる一六〇戸、同じく農間職人とみられる五三戸を数え、このほか医者二も分布していて、宿場町機能の継承がうかがわれていた。物産として、中等の生糸六三貫が上げられ、婦女子のうち、二〇〇人が養蚕、八人が縫物・織物両業に従事していた。人力車（一人乗り）一六・荷車（小車）一五・牡馬八を保有し、貢租として、地租米二九石・二一〇円のほか、雑税七九四円という高額を納めていた。また人口一四三三のうち、転入人口は三九二に及び、転出入口六五をはるかに越えていて、活性化の著しさを物語っていたのである。

C 授業料一四銭校立地集落

生徒数三〇人を示す旧城下町安中は、中山道のほか、富岡往還の支道が通ずる宿場町でもあった。河岸段丘上に位置し、耕作面積六町七反は、すべて畑であったが、宅地面積が、これをやや上回っていた。人口は一五二五であり、一戸あたりの家族員数は五・四であったが、同耕地面積は、約三反に過ぎなかった。その土壌は、桑に適すとされ、物産としては、自給用の穀物・蔬菜のほかに、上等繭七二石・中等蚕種紙四五〇枚が上げられ、生糸六五貫が、横浜へ送られていた。戸数四六九のうちには、養蚕農家七二、農間稼ぎも含まれたとみられる商家三七並びに職人七が数えられ、織物・養蚕両業に従事する婦女子は、一二七人に及んでいた。したがって、貢租として、地租一六円・賦金九七一円のほか、雑税三〇五円を納めていた。また、人力車四〇・荷車六が保有されていたことによって、その殷賑がうかがえよう。

一方、士族の戸数は、平民のその約二倍、またその人口は、同じく一・六倍に及び、一戸あたり家族員数は、平民の五・六に対して、士族は四・七であった。そして、平民人口九〇〇のうち、転入人口は、その一二％にあたる一〇七を数えていた。士族の場合、転入戸数の割合は五％、同人口の割合は三％であったが、転入人口は、士族人口の三三％に及んでいた。つまり、士族の著しい転出に対して、平民の転入が、漸次、着実に進行していたといえよう。

同じく生徒数三〇人を示す前代田は、前橋に南接する旧前橋藩領であり、八幡山道沿いの街村であった。土壌の点では、稲・麦には適すが桑や茶には不適であるとされ、また耕作面積約三三町一反のうち、田・畑の比は、ほぼ二対一であったが、物産としては、前橋へ売られる繭四四石・生糸八三貫が上げられていた。旧城下町前橋に接するため、戸口の約二〇％が士族であった。一戸あたりの家族員数は、平民・士族ともにほぼ五であったが、同じく耕作面積は、

四反四畝に過ぎなかった。

総戸数七六のうち、農間商いとみられるもの八、同じく農間雑業と考えられるもの七のほかは、養蚕農家であり、婦女子の多くは、専ら蚕糸業に従事していた。かくて、貢租としては、地租米七四石・五〇円、賦金一円のほか、雑税二二円を納めていた。そして、荷車（小車）六・人力車（一人乗り）一ならびに牡馬一七が保有されていた。人口移動については、平民だけに認められ、転入は平民人口の約四%、転出は同じく約二%であった。

(二) 中位階層校立地集落

A 授業料二三銭・生徒数二〇人校立地集落

旧前橋藩領の横室は、標高一五〇〜一六〇メートルに位置し、北方に国見ヶ岡、東方に細ヶ沢を帯び、沼田街道に沿う拠点であった。村域の四分の一が山林であり、耕地面積六一町四反のうち、田・畑の比は、ほぼ三対四であった。その土壌は、稲・麦・桑に適すが綿については好適とはいえずとされ、しばしば旱害に苦しんでいた。しかし、上質米約一五〇石のうち、自給用以外は、すべて前橋に送られており、一方、乾繭二五〇貫からつくられた上質生糸が、横浜へ出荷されていた。養蚕農家八六戸、農間酒造・農間質商各四戸¹⁴が認められ、蚕糸・織物・縫物各業に従事する婦女子は、一二〇人に及び、赤城山西麓利用の牧馬を反映する牡馬・牝馬の頭数は、各三一・二七に達していた。同じく旧前橋藩領の上下出は、東方に弥次川、中央に広瀬川、西方に利根川が、それぞれ南流していて、北越清水越（越後道）とその支道沿いの拠点であった。耕作面積六二町六反のうち、田・畑の比は、ほぼ二対三であり、その土壌は、稲・麦・桑に適していた。物産としては、米三一八石・蛹四八〇貫のほか、麦・米・大豆・粟・稗が上げられ、生糸一六貫が前橋へ売られていた。養蚕農家が七八戸、蚕糸業に従事する婦女子は、一五六人に及び、牡馬二

三・牝馬一を保有する一方、転入戸口は七戸・二九人、転出人口は一〇人であり、前橋への近接が、人口移動に拍車をかけていたものとみられる。

B 授業料一三銭・生徒数三〇人校立地集落

川越台地に位置する旧城下町川越には、四校¹⁵が分布していた。川越は、新河岸川の水路のほか、川越街道・松山道・小川道・浦和道が通じ、「平坦城墟東方にあり其西に市街縦横人家櫛比し商賈肆居を列ね日用百般の用一として備らざるなく県（熊谷県〔群馬県と埼玉県荒川以西〕、筆者注）下第一の都市¹⁶」とされていた。

町屋外側の二五四町九反に及ぶ耕地は、田・畑が相半ばし、その土壌は稲・桑・茶に適すとされ、物産としては、米一一三八石・小麦二九二石・大豆三三四石・大角豆二六石・鶏八五〇羽・鶏卵五一〇〇個の農・畜産物が上げられていた。一方、木綿織手拭地七万三三〇〇反・川越縞地三万一八五〇反・本絹結城縞二九二八反・糸入縞二〇九〇反・二子織一三五〇反の織雑品、綿繰台二五〇挺・綿繰ネヂ二〇束の織雑器械類のほか、箆筒一九八五組・鏡台五五一本もつくられていた。しかし、貢租として、地租米五三三石・二二三円、賦金六一〇円を納めていたが、雑税については記載されておらず不明である。

男が農・商・工各業を専らとしていたのに対して、婦女子は農・商・紡織各業に従事することが多かった。総戸口のうちで、士族が四三〜四五%をしめ、平民の転入については、戸数では〇・六%、人口では四%をしめていた。しかし、一方では、転入人口は、平民・士族とも七%に達し、維新に際して人口の流出が著しかったことが分かる。ともあれ、荷車（中車）二六一、人力車一一二（二人乗り四、一人乗り一〇八）・小船・牡馬一〇が保有され、前述のような旧城下町機能が、持続していたものとみられる。

川越に接続する町屋をもつ松郷は、川越藩領であった。町屋外側にある一八二町五反の耕地は、田・畑が相半ばし、その土壤は麦・芋に適するとされ、物産としては、川越とほぼ同様、米七六五石・大麦三五〇石・小麦一〇〇石・大豆二五〇石・小豆七五石・鶏一〇〇羽・鶏卵三〇〇個・鰻一五貫の農・蓄・水産物が上げられ、木綿織一〇万五〇〇〇反がつくられていた。そして、貢租としては、地租米三七九石・二三五円、賦金一五〇円を納めていたが、川越同様、雑税については記載されておらず、不明である。また、男は農業・商業を専らとしていたのに対して、婦女子は、農業・織物業に従事する者が多かった。

士族は、総戸数五二五の二%、総人口二四二六の〇・七%に過ぎなかった。そして、平民の転入が同戸口の一%・七%であったのに対して、士族のそれは、同戸口の一〇%・一三%であり、川越とは異なり、士族の転入がみられた。これは、維新にあたって、士族が川越から流入したためであろう。このことは、川越街道・八王子道・浦和道・所沢道に通じ、荷車四五・人力車二八及び牡馬一一を保有していた交通事情を考慮すると、頷くことができよう。

前橋の東南約四キロメートルに位置し、旧前橋藩領であった後閑は、東方に広瀬川が南流する一方、藤川が西南方を環流し、その土壤は稲・桑に適すとされ、物産として上げられる繭二一〇石・生糸二五貫は、前橋へ送られたものとみられる。村域の約一五%が山林であり、耕作面積一三七町九反のうち、田・畑の比は三対二であり、一〇四戸のうち、農間雑業とみられる一戸を除けば、すべて養蚕農家であり、婦女子の多くは、蚕糸業に従事していた。一戸あたり家族員数は四・七、同じく耕作面積は約一町三反であり、牡馬五二を保有し、貢租としては、地租米二〇九石・一八〇円のほか、雑税五円を納めていた。

前橋の東方約二キロメートルに位置する西片貝も、同じく旧前橋藩領であった。南方に広瀬川が流れる平地で、そ

の土壤は、稲には適すが桑・茶には不適とされたものの、物産としては、生糸四三貫・繭一八石が上げられ、後閑と同様、前橋へ売られたものとみられる。耕作面積一三六町四反のうち、田・畑の比は、ほぼ三対二であり、養蚕農家は一〇六、蚕糸業に従事する婦女子は一八人に達し、牡馬四五が保有されていた。

(三) 下位階層（授業料一三銭・生徒数四〇人校）立地集落

赤城山西麓に位置し、清水越道・同支道・三国支道・沼田通東往還が通ずる津久田は、旧前橋藩領・旧旗本保々領の相給であった。耕作面積二三三町のうち、田・畑の比は、一対九であり、その土壤は、稲・麦には余り適しないが、桑には適すとされていた。物産の中では、前橋に送られる上質生糸二四〇貫、前橋その他に売られる上質煙草一四〇貫、各地向けの松及び杉板二万枚、屋根板一万五〇〇束の他は、米三一〇石・大麦一万五〇〇石・小麦四八〇石が、村内自給用であった。養蚕農家は二四〇戸、養蚕・紡織両業に従事する婦女子は二〇〇人を数えたが、一方、牡馬一五に対する牝馬一一二の保有は、畜産の盛況を窺わせていた。そして、転入が全人口の〇・一%、転出は同じく〇・七%というわずかな移動が、認められたに過ぎない。

榛名山東南麓に位置し、鳥川沿いの北国往還と、ここから南折する板鼻道が通ずる下里見は、旧高崎藩領であった。戸数は一六二戸であり、一戸あたりの家族員数は四・三であり、同耕作面積は六反五畝に過ぎなかった。養蚕農家は一五四戸、うち職人を兼ねるものが三戸、養蚕に従事する婦女子は二〇六人を数え、牡馬の保有頭数は、六五に及んでいた。耕作面積一〇四町九反のうち、田・畑の比は、ほぼ一対三であり、その土壤は、小麦・綿に適すが、稲・桑には不適とされた上、霜害もしばしばみられた。しかし物産については、繭一二六石・生糸四九貫・絹三三〇匹・太織一〇五匹が上げられ、貢租としては、地租米一二三石・一六〇円、賦金三円のほか、雑税二八円を納入していたの

である。

赤城山西南麓に位置し、西北方から南流する細ヶ沢に沿う原之郷は、旧前橋藩領であり、沼田街道に沿い、東方へは五輪街道、西北へは榎街道が通じていた。村域の約六分の一が山林であり、耕作面積一七〇町六反のうち、田・畑の比は、一对三であつて、その土壤は、稲・麦類と下等桑に適すとされたが、旱害に悩まされることが多かった。しかし物産としては、前橋向けの上質生糸一八〇貫が上げられ、上質米一五〇石・大麦五石・小麦三〇石が、前橋及び白井へ送られていた。養蚕農家一八七戸のほか、農間渡世とみられる職人二戸・酒造一戸がみられ、蚕糸・織物・縫物業に従事する婦女子は、二五〇人に及んでいた。しかも、牡馬八三・牝馬一九を保有して畜産に励み、戸口の動きについては、転入が全戸数及び人口の二%、〇・六%、転出は同じく〇・五%、〇・二%とにとどまっていた。

箱田は前橋の南西に位置し、旧高崎藩領であり、高崎道・渋川道に通じていた。東・西に用水路があり、それらの中央に井野川が南流し、耕作面積八七町六反のうち、田・畑の比は、三対二であつた。農家数は七五戸であり、一戸あたり家族員数は四・三、同じく耕作面積は一町一反六畝であつた。土壤は諸種の作物に適すとされていたが、物産としては、高崎へ送られる繭二三石が上げられ、ここでも、養蚕農家における婦女子の労働力は多大であつた。牡馬三〇頭を保有し、また貢租としては、地租米一六九石・四八円、雑税四円を納めていた。

妻沼の東南約三キロメートルに位置し、葛和田河岸道が通ずる上須戸は、旧旗本岡野・加藤両藩相給の地であつた。南は福川、北は道閑堀に臨む低地によつてしめられ、農家数は一〇九戸であり、一戸あたり家族員数は四、同耕作面積は七反であつた。土壤は、稲には適すが桑・茶には不適とされ、しばしば水害を受けていた。耕作面積七六町九反のうち、田・畑の比は、一对三であり、物産については、米九八石・大麦二七六石・小麦四八石・菜種八〇石・大豆

三五六石・小豆一二石が上げられ、貢租としては、賦金・雑税はなく、地租米四九石・一六七円だけを納入していたに過ぎない。ここでは、転出が、人口の約5%に及んでいたが、前述のような葛和田河岸道に沿う立地条件が、活性化の背景をなしたものとみられる。

下滝は、高崎の東方約五キロメートルに位置し、高崎道が通ずる旧幕府領であった。一戸あたりの家族員数は五・一、同耕作面積は九反二畝であった。耕作面積六六町九反のうち、田・畑の比は、ほぼ一対二であり、東南に猪野川が流れ、土壌が砂礫質であるため、米作には不適とされていた。農家数七二戸のうち、農間雑業の二戸のほかは養蚕農家であり、婦女子の労働力の多くは、紡織・蚕糸両業に向けられていた。物産としては、繭三三〇貫・絹二〇匹・太織二五匹・生糸二貫が上げられ、玉村・岩鼻・高崎に売られたものとみられる。荷車(小車)三・牡馬四〇を保有し、貢租としては地租米六二石・八九円のほか、雑税五〇円を納入していた。そして、全戸口に対する転入戸口の率は、各二・七%、一・二%であったのに対して、転出については、〇・三%に過ぎなかった。

四 むすびにかえて

以上のように、プロト産業化期において、著しい活性化を遂げた群馬・埼玉両県の二六集落を取り上げると、おおよそ、上位・中位・下位の三階層校立地集落に分けることができる。そこで、集落の最高活性化と、各階層の実態との関係は、次のようにまとめられる(表)。

(一) 活性化の階層と旧所領の関係をみよう。旧所領については、前橋藩一二が最も多く、川越藩五、旗本藩相給三、安中藩・高崎藩各二、上総久留里藩・幕府直轄各一であった。ところで、上位階層集落においては、前橋藩六、安中

表 群馬・埼玉両県における公立小学校立地集落の最高活性化—土地と戸口—(明治7年)

階 層	集 落 数	幕末の所領							耕地		士族・平民の戸数			人口移動			移動人口(人)		
		前 橋 藩	川 越 藩	旗 本 相 給 藩	安 中 藩	高 崎 藩	上 総 久 留 里 藩	幕 府 直 轄	畑 の 方 が 広 い	田 の 方 が 広 い	a 平 民 の み	b の 士 族 % が 以 上	c の 士 族 % が 未 満	a 移 動 な し	移動あり		平 民	士 族	計
		b 転 入 超 過	c 転 出 超 過	移動あり	移動あり	移動あり													
上	11	6	2	2	1		10	1	6	4	1	5	5	1	1,070	- 397	673		
中	9	4	5				7	2	4	4	1	3	2	- 104	- 313	- 417			
下	6	2	1	2		1	5	1				2	3	32		32			
計	26	12	5	3	2	1	22	4	16	8	2	10	10	6	998	- 710	288		

(注) 階層の上は、授業料(1人あたり・月額、以下同じ)14~19銭・生徒数(教員1人あたり・10人未満四捨五入、以下同じ)20~40人、中は、授業料13銭・生徒数20~30人。下は、授業料13銭・生徒数40人の各小学校立地集落。『文部省第2年報』・『皇国地誌』から算出。

藩・旗本藩相給各二、上総久留里藩一であり、前橋藩のウエイトが大きかった。これに対して、中位階層集落では、川越藩五、前橋藩四であり、さらに下位階層集落では、前橋・高崎両藩各二、旗本藩相給・幕府直轄各一であった。つまり、中位階層では、むしろ、川越藩が前橋藩をしのぐウエイトをもち、下位階層では、前橋・高崎両藩にウエイトがあるものの、バラエティーに富む旧所領に属していた。

(二) 活性化の階層と、耕作地の状況の関係をみよう。水田よりも畑の方が広い集落は二二であり、逆に水田の方が広い集落は四であった。これを階層別にみると、上位階層では、前者一〇に対して後者一であり、前者が圧倒的に多かった。しかし、中位階層(前者七・後者二)と下位階層(前者五・後者一)を比較すると、むしろ、下位階層の方が、中位階層よりも、畑の方が広い集落の割合が、やや高かったことが注目される。一般に、一戸あたりの耕作面積が狭く、自然的条件に必ずしも恵まれなかったが、桑園分布を基盤とする蚕糸業の発展が、活性化を促進させていた

ものとみられる。

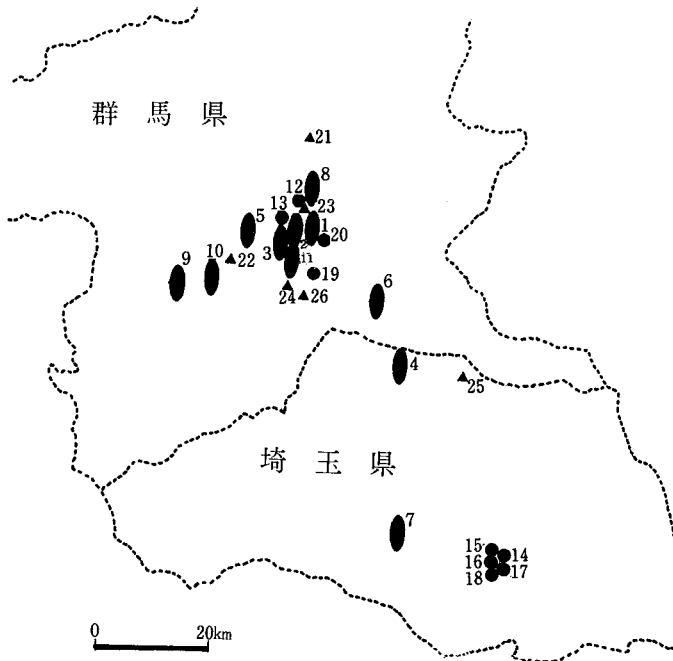
(三) 活性化の階層と、士族・平民の別との関係をみよう。そこで、平民のみによって構成された集落を(a)、士族も居住したが、それが平民の五〇%以上に達した集落を(b)、同じく五〇%未満の集落を(c)とすると、(a)が一六、(b)が八、(c)が二であった。しかし、上位階層では(a)六・(b)四・(c)一、中位階層では(a)四・(b)四・(c)一、下位階層では(a)だけであった。つまり、下位階層では、平民による活性化が著しく、上位・中位階層を比較すると、前者の方が、平民による活性化のウエイトが大きかったのである。また、上位・中位階層とも、(b)は(c)の四倍に達している、士族の分布が、集落活性化の大きな要因であったことがうかがわれる。

(四) 活性化の階層と、人口移動の関係をみよう。寄留人口の分布によって、移動状況を推測し、移動がみられなかった集落を(a)、移動がみられたが、転入超過であった集落を(b)、同じく転出超過であった集落を(c)とすると、(a)・(b)はともに一〇であり、(c)は六であった。そして、上位階層では(a)五・(b)五・(c)一、中位階層では(a)三・(b)二・(c)四、下位階層では(a)二・(b)三・(c)一であった。すなわち、上位階層は、中位・下位階層よりも移動率が低く、安定人口を保持していた。また、転入超過集落数と転出超過集落数の関係が、上位階層では、前者は後者の五倍、下位階層では同じく三倍であったが、中位階層では、二分の一であった。つまり、転入が、上位階層に次いで下位階層に多かったのに対して、中位階層では、逆に転出が多く、いわゆる階層分化がみられたのである。

しかし、人口移動の明らかな一六集落について、士族・平民別の移動を検討すると、平民の転入と士族の転出が著しかったのは、上位階層であり、中位階層では、わずかながら平民の転入が認められたに過ぎない。

(五) 一般に、階層が高いほど、就業構造が高度化していて、一戸あたり馬保有頭数が多く、さらに牡馬保有の多頭

の周辺に分布していた。そして、埼玉県側の南部では、単独の上位階層集落である越生と、前記の川越々松郷地域が、組み合わされていたのである。しかも、分布の、主体となっていた北部においては、上位の活性化は、核心地と拡散



- 授業料(1人あたり・月額以下同じ)14~19銭・生徒数(教員1人あたり・10人未満四捨五人以下同じ)20~40人
- 授業料13銭・生徒数20~30人
- ▲ 授業料13銭・生徒数40人

図 群馬・埼玉両県の公立小学校からみた最高活性化集落 (明治7年)

- | | | | | |
|--------|--------|--------|-------|--------|
| 1 前橋 | 2 同 | 3 同 | 4 内ヶ鳥 | 5 東明屋 |
| 6 今泉 | 7 越生 | 8 石井 | 9 松井田 | 10 安中 |
| 11 前代田 | 12 横室 | 13 上小出 | 14 川越 | 15 同 |
| 16 同 | 17 同 | 18 松郷 | 19 後閑 | 20 西片貝 |
| 21 津久田 | 22 下里見 | 23 原之郷 | 24 箱田 | 25 須戸 |
| 26 下滝 | | | | |
- 『文部省第2年報』『皇国地誌』から算出

化によって裏付けられる牧馬の普及がみられた。いいかえれば概して産業構造の高度化が、階層の上昇につれて著しく表われていたのである。

(六) かくて、上位階層集落は、前橋を中心に分布したものの、かなり離れた周辺の外側部にも拡散していた。これに対して、中位階層集落は、川越々松郷のほかは、すべて前橋

的な外側部にみられたが、特に核心地では、中位の活性化を付随していたのに対して、下位の活性化は、上位の活性化とともに、拡散の傾向をみていたのである(図)。

注・参考文献

- (1) 歴史地理学会常任委員会「第三二回歴史地理学会・共同課題『変革期の歴史地理』について」歴史地理学、一四二、一九八八、表紙裏
- (2) 田村正夫「日本におけるプロト産業化期の地域活性化——群馬・埼玉両県の公立小学校の授業料・教員数を手がかりに——」城西大学院研究年報、四、一九八八、一頁
- (3) 前掲(2)一〇三頁、別図一〇枚
- (4) 田村正夫「日本製糸業の地域的展開」城西経済学会誌八一、一九七二、八八頁
- (5) 授業料総額が掲載されている学校については、それを当該学校の生徒数で除し、銭未満を四捨五入した。また生徒数については、各校総生徒数を教員数で除し、一〇人未満を四捨五入した。
- (6) ④ 群馬県『上野国郡村誌』(一八七七〜一八八五) 群馬県文化事業振興会、一九七七〜一九八七復刻
 ⑤ 埼玉県『武蔵国郡村誌』(一八七五〜一八七六) 埼玉県立図書館、一九五三復刻
- (7) 前掲(5)。以下「授業料」は、生徒一人あたりの授業料をさす。
- (8) 前掲(5)。以下「生徒数」は、教員一人あたりの生徒数をさす。
- (9) 寄留による転入である。以下同じ。
- (10) 寄留による転出である。以下同じ。
- (11) なお、このほか、一華族・五人が居住していた。
- (12) 牛については、一八七七年に南曲輪町の赤城仮牧社において牝牛四頭からの搾乳があり、牧牛は、専ら赤城山麓において行われていた。
- (13) 他地域の転出人口は、八人に過ぎなかった。

- (14) 農間酒造のうち、二戸は、転入したものである。
- (15) 鍛冶・喜多・志義・三芳野各校
- (16) 前掲(6)③四卷、二二二頁